給食時における幼稚園教諭と小学校教諭の発話分析とその比較

―「既存型食育」の枠組みの解明を目指して―

今村光章・西岡さゆり

Analysis and Comparison of the Speeches of Kindergarteners and Elementary School Teachers during the lunch time

－Searching for the reframing of “existential” dietary education (food education)－

Mitsuyuki Imamura and Sayuri Nishioka

Ⅰ．目的と課題

本論文の目的は，幼稚園教諭と小学校教諭の給食時の発話を分析し比較することである。

第一著者の今村は，2007年から2008年にかけて，給食時間における幼稚園教諭の発話分析を実施し，幼児期における「既存型」の食育の枠組みを解明した。ここでいう「既存型」の食育とは，「食育という用語が普及する以前に，親や保育者と子どもの間に存在していた食に関する指導」である。明確に食育とまでは認識されていないが，食育に近い性質を有する指導や援助のことである。

他方，食育という用語が流通したのち，その理念のもとに意図的かつ計画的な食に関する教育活動を「理念型食育」と名づけた。もとより，「理念型食育」の重要性もさることながら，他方で「既存型食育」もある程度は重要性ではないかと指摘した。その裏付けとして，幼稚園教諭の給食時間の発話分析を行った（今村 2008）。

給食時の幼稚園教諭の発話分析の結果，①幼稚園教諭の食事中のコミュニケーションの中で最も多いのは，摂食促し発話（40%）であり，次いで，日常会話発話（19%），マナー指導発話（18%）であることが判明した。また，②幼稚園教諭の給食時の発話では，摂食行動に関する内容が非常に多い反面，直接的な栄養指導発話はごくわずかで２%しかないことも明らかになった。③幼稚園教諭の個別の発話回数と発話内容にかなりの偏りがあることや，④多様な摂食促し発話があるが，摂食促し発話の戦略をすべてバランスよく用いている教諭はいないことも明らかになった。なお，本文中のパーセンテージの数値はすべて小数点第一位以下を四捨五入した概数値である。

本稿においては，こうした研究成果を踏まえ，小学校においても同様に，給食中の「既存型」とも称することができる食に関する「教え」があることを指摘したい。ひいては，年長児担当の幼稚園教諭と小学校１年生担任の教諭の発話を比較することによって，幼稚園と小学校における食の指導に関する違いを浮き彫りにし，幼小接続の「既存型」食育のありかたを模索してみたい。

Ⅱ．研究方法

調査対象は，岐阜県内のＧ市内の私立幼稚園（計２園）の年長児を担当する幼稚園教諭５人，および，岐阜県内のＧ市内とＨ郡内の国公立小学校（計３校）の第1学年を担当する小学校教諭５人であ

る。合計10名である。

調査期間は，予備調査の時期が2014年５月から７月であり，この期間に給食時に幼稚園および小学校を訪問し，ビデオカメラの録画のテストを含め，研究方法を詳細に検討した。その後，2014年９月から11月に，合計20回，幼稚園と小学校に訪問し，11頃から14時頃まで滞在し，データを収集した。

分析の対象となる給食時間は，一斉に食事前の挨拶として唱和することが多い「いただきます」から，最後の「ごちそうさま」までの間とする。

データ収集の方法は，ICレコーダーを教諭の襟元につけ，教諭の発話内容を全て録音する。同時に自分で観察をし，メモをとる。データ収集は各教諭に対して２回ずつ行い，幼稚園教諭５人×２回の10データと小学校教諭５人×２回の10データ，合わせて20データを収集・分析をし，比較検討を行った。

分析は，まずICレコーダーを聞きながら逐語録を作成した。逐語録を作成する際，ひとつの発話開始と終了の条件を以下のように設定した。

①発話の対象（話しかける相手）が変更した場合

②発話の対象が同じでも話題が変更した場合

③３秒程度の間隔がある場合

逐語録作成後，次に述べるカテゴリーに発話内容と発話対象に分類した。

給食時間における教諭の発話の分析カテゴリーを作成するために，まず大きく２つの視点によって発話を分類する。２つの視点とは，発話内容と発話対象である。第一に，発話内容とは，教諭が何について話しているのかということである。第二に，発話対象とは，教諭が誰に話しかけているのかということである。この２つをさらに細かく分類した。

まず，教諭が何について話しているのかという発話内容を次の７つに分類する。

１つ目は，摂食促し発話である。摂食促し発話とは，食べさせる，あるいは食べることに関する教諭からの働きかけと定義した。本研究では，「パプリカ美味しいよ。もう少し食べてみやー。」のように，子どもが食べることを促す教諭の言葉がけを摂食促し発話とする。

２つ目は，マナー指導・注意発話である。マナー指導・注意発話とは，姿勢や礼儀，作法などのマナーについて話す，あるいは注意をすることである。たとえば，「イス前に出して，机におへそくっつけて食べやー。」，「座りなさい。」のように，食事をする上での姿勢や礼儀，作法についての言葉がけをマナー指導・注意発話とする。

３つ目は，栄養指導発話である。栄養指導発話とは，食材に含まれている栄養について話すことである。たとえば，「キャベツのお仕事は飲み込んだバイキンマンをやっつけるんだったね。」のように，栄養に関することや，食材のはたらきについての言葉がけを栄養指導発話とする。

４つ目は，価値付け発話である。本研究における価値付けとは，給食場面において子どもを褒め，認めることである。たとえば，「全部食べれた？○○ちゃん，頑張りマンだね。すごーい。」のように，子どもを褒めたり，子どもの行為や行動を認めたりする言葉がけを価値付け発話とする。

５つ目は，片づけ指導・次の活動に関する発話である。片づけ指導とは，食器や果物が入っていた袋などの片づけ方を教えたり，子どもに片づけすることを促すように話したりすることである。また，次の活動に関する発話とは，給食時間後の活動についての説明を話すことである。たとえば，「コップ片づけてないよ。コップ忘れん坊さんでーす。」，「次の時間はパソコンなので，お机そのままで，おイスはお机の上に置いておいてね。」のように，給食を食べ終わった子どもに対して食器などの片づけを促したり，給食後の動きの説明をしたりする言葉がけを片づけ指導・次の活動に関する発話とする。なお，準備促し発話は項目として設けなかった。なぜなら，本研究の分析の対象を「いただきます」からの時間としたからである。

６つ目は，日常会話・挨拶発話である。日常会話とは，前に挙げた５つの分類に入らないような会

話のことである。たとえば,「夏休み沖縄に行ってきたの？楽しかった？」のように，世間話のような話をしている言葉がけを日常会話とする。また，挨拶発話とは,「いただきます」や「ごちそうさま」といった食事の始まりと終わりの言葉などの発話のことである。これら２つを合わせて，日常会話・挨拶発話とする。

７つ目は，意味不明発話である。意味不明発話とは，完全な聞き取りが困難な発話のことである。

以上のように教諭がどのような内容の発話をしているかという発話内容については,

Ａ．摂食促し発話
Ｂ．マナー指導・注意発話
Ｃ．栄養指導発話
Ｄ．価値付け発話
Ｅ．片づけ指導・次の活動に関する発話
Ｆ．日常会話・挨拶発話
Ｇ．意味不明発話

以上の７点に分類する。

次に，教諭が誰に話しかけているのかという発話対象を次の４つに分類する。

１つ目は，教諭が一人の子どもに対して話しかけている場合である。たとえば,「○○ちゃん，座って飲もうか。」,「○○くん，ピーマン美味しいよ。」のように，名前を示したり，顔を向けるなど，特定の一人の子どもに対して直接話しかけている場面はこれに該当する。この対象の分類を「一人」とする。

２つ目は，教諭が数人の子どもに話しかけている場合である。たとえば,「○○ちゃんと△△ちゃん，給食中は遊ばないよ。」,「放送流れてるのに，６班から声が聞こえます。」のように，数人あるいはグループに話しかけている場合はこれに該当する。この対象の分類を「数人」とする。

３つ目は，教諭がクラス全員に話しかけている場合である。たとえば,「みんな，６のところに長い針がきたらごちそうさまするよ。」,「１組さん，ちょっと今日はおしゃべりしている人が多いかな〜。」のように，クラス全員に話しかけている場合はこれに該当する。この対象の分類を「全員」とする。

４つ目は，子どもに話しかけるでもなく，教諭がひとり言を話している場合である。この対象の分類を「ひとり言」とする。

教諭が誰に話しかけているのかという発話対象は,

①　一人
②　数人
③　全員
④　ひとり言

以上の４点に分類する。

分類の表から除外することとなったのは，他の教諭との会話や他のクラスの子どもとの会話である。

以上のように，表から除外となるものを除き，発話内容を７点，発話対象を４点に分類して，分析および比較検討を行う。

Ⅲ．結果および考察

(1) 発話回数の合計について

幼稚園教諭５人の合計発話回数（５人×２回＝10回）と小学校教諭５人の合計発話回数（５人×２回＝10回）を比較する。幼稚園教諭は1738回，小学校教諭は，1360回であった。それぞれ10回分であるので，平均すると，１回の給食時間に幼稚園教諭は173回，小学校教諭は136回発話をしており，幼稚園教諭のほうの発話が多いことが分かる。

その原因は，比較的，幼稚園の方が給食時間が長かったということもあるだろう。だが，給食時間の過ごし方の違いの現れとも捉えられる。本研究の対象になった小学校３校においては，給食時間の私語は禁止という決まりがあった。また，給食時間に流れる校内放送をしっかり聴くようにとの指導もあった。小学校では私語の禁止が決まりとなっているために，小学校教諭も給食時間中は必要最小限の発話に抑えようとしているのではないかと考えられる。

一方，本研究の対象とした幼稚園2園においては，Ａ幼稚園では給食時間に音楽を流しており，私語していても，給食時間終了間際に食べ終わってない子に指導する場合以外は，ほとんど私語の禁止を呼び掛けるような指導はなかった。Ｂ幼稚園では，給食時間に音楽を流すことはなかったが，子どもたち同士の会話を大切にし，あまりにも給食を食べるのに支障をきたしている場合にのみ私語の禁止の指導を行っていた。これら２園では，私語の禁止を徹底するような指導はなされていなかった。このような小学校と幼稚園の給食時間の在り方の違いが両教諭の発話回数の合計に影響を与えたと推測できる。

(2) 発話内容について

幼稚園教諭５人の発話内容のカテゴリー分けごとの合計と小学校教諭５人の発話内容のカテゴリー分けごとの合計を比較する（表１）。パーセンテージと回数のみであるので，表とした。

また，図１と図２は，各々の幼稚園教諭・小学校教諭ごとの発話回数をグラフにしたものである。それぞれの発話回数のばらつきが明瞭に分かるようにグラフで示した。この図１・２でわかるように，給食時の個々の教師の発話回数にはかなりの隔たりがある。

表１　幼稚園教諭と小学校教諭の発話内容の合計（各５人×２回＝10回分）

	幼稚園教諭	小学校教諭	合　計
（Ａ）摂食促し	250（14%）	185（14%）	435（14%）
（Ｂ）マナー	218（13%）	227（17%）	445（14%）
（Ｃ）栄養	90　（5%）	19　（1%）	109　（4%）
（Ｄ）価値付け	130　（7%）	85　（6%）	215　（7%）
（Ｅ）片づけ	75　（4%）	109　（8%）	184　（6%）
（Ｆ）日常会話	945（54%）	692（51%）	1637（53%）
（Ｇ）意味不明発話	30　（2%）	43　（3%）	73　（2%）
合　計	1738(100%)	1360(100%)	3098(100%)

（数値：回）

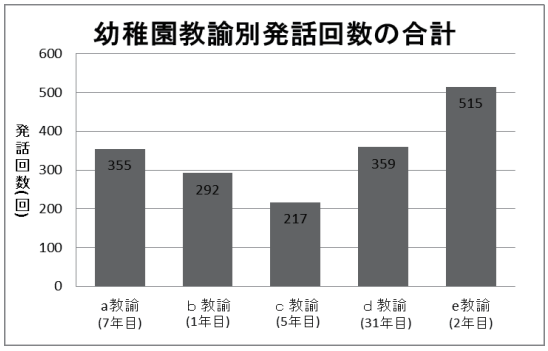

図 1

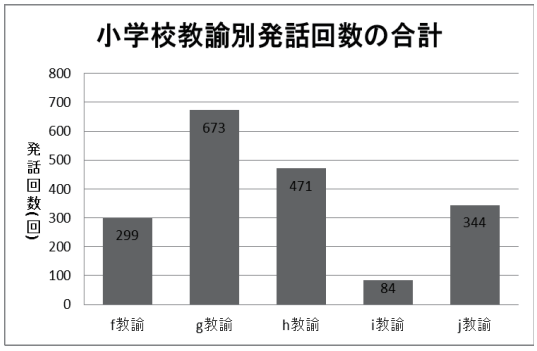

図 2

次に発話内容について検討する。幼稚園教諭と小学校教諭の発話回数の割合に差があったのは，（B）のマナー指導・注意発話と（C）の栄養指導発話，（E）の片づけ指導・次の活動に関する発話，（F）の日常会話・挨拶発話であった。ただし，わずかな差で 3 ～ 4 %であった。（A）の摂食促し発話や（D）の価値付け発話，（G）の意味不明発話に関しては，同じ割合か，差があっても 1 %の差であったので，おおよそ同じ割合であるとみることができる。

たしかに，（B）のマナー指導・注意発話は，幼稚園教諭が13%，小学校教諭が17%で，小学校教諭の方が 4 %高い割合を示した。だが，（B）のマナー指導・注意発話は子どもたちの状態（落ち着いているなど）に大きく左右されると考えられる。本研究の場面では，小学校の方が幼稚園よりも，マナーの指導や注意をする場面が多かったことが推測できる。しかしながら，（B）のマナー指導・注意発話は教諭が気づいた時になされる発話であり，教諭が気づかないところで指導すべき行為をしている場合があるかもしれない。また，教諭が気づいていても，他のことに追われていて，マナー指導や注意が疎かになってしまう場合もあるだろう。教諭がどこまで意識をして子どもたちの様子を見守っているかにもよる。本研究で明らかなのは，小学校教諭と幼稚園教諭のマナー指導・注意発話にさほど違いがないという点である。

（C）の栄養指導発話は，幼稚園教諭が 5 %，小学校教諭が 1 %となり，幼稚園教諭の方が小学校教諭よりも 4 %高い割合を示した。しかし，幼稚園教諭も小学校教諭も栄養指導発話が全体の発話の 5 %未満にすぎない。幼稚園教諭の方が小学校教諭よりもわずかながら栄養指導発話の割合が高かった点については，その回数を引き上げていかなければならないと言える。そうすることで食育における幼稚園と小学校の滑らかな接続につながると考える。

当然のことながら，この差をもって何か決定的なことは指摘できない。だが，いまだに食育が給食の時間に取り入れられていないとは言えるだろう。給食の時間だからこそ，目の前にある食材についての豆知識を教えることができる。食について五感を通して体験的に学ぶことができるのが給食の時間である。栄養指導発話については詳しくは後述する。

（E）の片づけ指導・次の活動に関する発話は，幼稚園教諭が 4 %，小学校教諭が 8 %となり，小学校教諭の方が 4 %高い値を示した。幼稚園では次の活動に関する発話を「ごちそうさま。」の前にしていることがあったが，片づけ指導の発話はあまり目立たなかった。一方小学校では，果物の入っていた袋やデザートの汁などの片づけ方を指導する場面がたくさん見受けられた。その結果，小学校教諭の方が片づけ指導・次の活動に関する発話の割合が高くなったと考えることができる。

（F）の日常会話・挨拶発話については，幼稚園教諭が54%，小学校教諭が51%となり，幼稚園教諭の方が 3 %高い割合を示した。この理由として考えられるのが，先ほど発話回数で述べた給食時間の私語を禁止する決まりがあるか，ないか，であると推測する。私語を禁止する決まりがない幼稚園では，給食時間中教諭も子どもの発話に耳を傾け，話をしていたりしていたため，日常会話・挨拶発

話の割合が高くなったと考えることができる。

(3) 発話対象について

次に，幼稚園教諭５人の発話対象のカテゴリー分けごとの合計と小学校教諭５人の発話対象のカテゴリー分けごとの合計を比較する（表２）。こちらもパーセンテージと回数のみなので，やや見にくいかもしれないが，表のみで示した。

表２　幼稚園教諭と小学校教諭の発話対象の合計（各５人×２回＝10回分）

	幼稚園	小学校	合　計
一　人	1311(75%)	849(62%)	2160(70%)
数　人	158（9%）	137(10%)	295(10%)
全　員	255(15%)	323(24%)	578(19%)
ひとり言	14（1%）	51（4%）	65（2%）
合　計	1738(100%)	1360(100%)	3098(100%)

（数値：回）

発話対象では，幼稚園教諭と小学校教諭の発話対象の「一人」と「全員」の２つのカテゴリーでやや大きな差が見られた。とくに大きな差があったのは，「一人」に対しての発話の割合である。幼稚園教諭は75%，小学校教諭は62%となり，幼稚園教諭の方が13%高い値を示した。幼稚園の方が「一人」に対しての発話の割合が高くなった要因として考えられるのが，幼稚園教諭は給食時間中，机間巡視をして子どもひとり一人に話しかけることが多かったことが挙げられる。小学校教諭も机間巡視をすることはあったが，幼稚園教諭の方が子ども一人当たりの指導時間，つまり接する時間が長かった。そのことが，この結果として表れている。

また，「全員」については，幼稚園教諭が15%，小学校教諭が24%となり，小学校教諭の方が９%高い割合を示した。小学校教諭は幼稚園教諭に比べ，ひとり一人の席に行って指導することが少なく，教諭の席から全体に対して発話することが多い。また，全体に呼びかけて，ひとり一人に意識させようとしている。教諭の発話を聞いて，子どもたち同士で声をかけ合う場面がたくさん見受けられた。小学校では，子どもたち同士で注意したり，教え合ったりすることができるようになっているので，教諭が「全員」に対する発話をたくさんしても，しっかりと子どもたちに伝わっているのだと考えられる。

たしかに，「全員」への発話をして，周りの子どもたちに注意されても，まだわかっていない子どもに指導することはある。しかし，幼稚園教諭に比べ，小学校教諭は全体に意識させることで個々人も意識するようになるという考えを強く持っており，そのことを常に意識して取り組んでいる。幼稚園教諭もそのような意識を持っていないとは言えない。だが，幼稚園児は小学校の児童より子どもたちの中で声をかけ合うという力がやや乏しいため，どうしても小学校教諭よりも幼稚園教諭はひとり一人に関わる場面が多くなってしまう。こうした子どもたちの現状の違いがこの結果として表れたのであろう。

なお，「数人」に対する発話は幼稚園教諭，小学校教諭であまり大きな差は見られなかった。

(4) 幼稚園教諭と小学校教諭の給食時間の発話についての比較の分析および考察

（Ｂ）のマナー指導・注意発話は，幼稚園教諭が13%，小学校教諭が17%，合計でも14%と割合で

みると低い値を示した。数値だけを見ると低いが，全発話カテゴリーの中では割合が高い方に分類される。マナー指導・注意発話は，給食時間を通して，子どもたちが食事中のマナーや決まりをしっかり身に付けるために必要な教諭の働きかけのひとつである。たとえば，お箸の持ち方，食べる時の姿勢，お皿の置く位置などが食事中のマナーとして挙げられる。決まりには，学級によって異なる場合もあるが，トイレは給食時間の前に行っておく，私語厳禁などがある。これらは子どもたちが集団の中で生きていくために，身につけておかなければならないこと，知っておかなければならないことである。だからこそ，段々と集団の一員として自覚が出てくる幼稚園年長から小学校第１学年での指導は非常に重要であると考える。

また，（B）のマナー指導・注意発話は，子どもたちの様子に大きく左右される発話である。子どもたちが落ち着いて給食時間を過ごしていれば，この発話数はすくなくなる。一方，子どもたちが落ち着いていない日，たとえば，後ろを向いて遊んでいる，喋ることに夢中になっている，食べ終わっているからと言って教室内で走り回っている，などの行動がある日はその行動に対して指導を行っていくので，自然とこの発話の回数が多くなる。本研究で，各教諭に対し，２回ずつデータを取りながら，学級の雰囲気，子どもたちの様子が日によって異なるので，それに合わせて教諭のマナー指導・注意発話の発話回数も異なるということが明らかになった。

また，マナー指導すべき子ども，遊んでいるなどで注意をしなければならない子どもがいるにも関わらず，マナー指導・注意発話をすることができていない場面も何度かあった。教諭も自分の給食を食べたり，他の仕事があったりして忙しいが，子どもたちの様子に目を向けて，子どもたちが今後恥ずかしい思いをすることがないように，しっかり指導を行っていかなくてはならない。とくに，マナー指導・注意発話は子どもたちの様子に大きく左右されることを踏まえ，給食時間までに子どもたちのその日の様子を把握し，その状態にあった指導が求められると考える。

（B）のマナー指導・注意発話の内容をカテゴリーをもとに比較してみると，幼稚園教諭の「お箸，頑張りなさい。」と，小学校教諭の「食器具の使い方・食器具の置き方」は似ている。それぞれの内容を詳しく見てみよう。幼稚園では，お箸の持ち方やお箸でまず頑張ってみてからフォークにするように指導をするなどの内容であった。小学校では，食器の置く場所の指導やお茶碗を持って食べるように注意をするなどの内容であった。幼稚園の年長児では，まだお箸を上手に使えない子どもがいるが，小学校ではほとんどの子どもがお箸を上手に使えるようになっている。そこで，食器具の使い方や置き方の指導という段階に進んでいる。この２つのカテゴリーから幼稚園年長から小学校第1学年までの子どもの成長を読み取ることができる。

また，小学校教諭の「クラスのルール違反」の主な内容は給食時間中にトイレに行く子どもに対する注意の発話であった。一方，幼稚園では，給食時間中にトイレに行く子どもはいたが，教諭は「いってらっしゃい。」と言って，トイレに行くことについて注意するということはなかった。このことから，幼稚園と小学校には指導の上で違いがあることがわかる。この点をひとつとってみても，幼稚園と小学校がお互いの指導について知ることによって，滑らかな接続につなげられるのではないだろうか。

小学校教諭の「時間を意識させる」は，摂食促し発話とほとんど似ている部分もある。小学校では時間を意識させる発話がたくさんされていた。時間が限られているため，その時間内に食べさせることを重視している。一方，幼稚園では時間は意識させてはいるものの子どもたちの進行状況に応じて，「ごちそうさま」の時間が変更されることが多かった。時間を意識させてはいるものの，時間にあまり縛られていない幼稚園と，時間内に食べ終わることを重視している小学校では違いがある。データ収集を行った時期が９～11月であったため，まだ小学校に向けての指導をしていないのかもしれないが，幼稚園から小学校に上がった時に，この変化に戸惑う子どももいるかもしれない。今後解決しなければならない課題である。

幼稚園教諭と小学校教諭で違いがみられる発話内容は，子どもたちの発達の段階に合わせた指導であると捉えることもできる。しかし，先ほどから述べているように，幼稚園では許されていたことが小学校に上がって急に許されないことに変わるとなると，子どもたちは混乱するだろう。本研究が幼稚園教諭と小学校教諭がお互いの指導のあり方を知るきっかけになれば幸いである。

(5) 栄養指導発話（食材に関することを含む）について

栄養指導発話は，幼稚園教諭で90回（５％），小学校教諭で19回（１％）となり，幼稚園教諭と小学校教諭の発話回数を合計しても109回であった。これは，幼稚園教諭と小学校教諭の全部の発話回数が3098回なので，おおよそ30回に１回しかの栄養指導発話がされていないということがわかった。また，割合に注目してみても，幼稚園教諭が５％，小学校教諭が１％とともに低い値を示した。とくに小学校教諭は１％であり，ほとんど栄養指導発話が行われていないという結果となった。

５人の幼稚園教諭のうち４人の教諭が栄養指導発話をしていた。その４人の教諭に共通した発話が「この○○，何でしょう？」のように，食材の名前を答えさせるクイズ形式の発話で栄養指導をされていたことである。栄養指導と言っても，食材の名前を答えさせたり，その後その食材のはたらきについて簡単に紹介する場合が多かった。あまり，栄養指導とは言えないかもしれないが，年長児は教諭が出した問題をきっかけに食材について興味を示し，一生懸命に考えたり，反応したりしていた。食材について興味を持つということは食育において重要である。興味を持つことで，もっと知りたいなどの好奇心が生まれてくる。それが子どもたちの学びにつながる。また，幼稚園教諭がしていた食材のはたらきについての説明は，年長児にわかりやすいと思われる言葉が使われていた。専門的な言葉で教えても子どもは理解できないが，こうやって簡単な言葉に置き換えて教えてあげることで，子どもたちも食材のはたらきについて知ることができると考えられる。

一方，小学校教諭の栄養指導発話は，５人中３人がしていた。内容は，幼稚園教諭に比べ，食材について考えさせるという発話が少なく，食材に触れた発話をしているだけで，栄養指導と言えるものがほとんどなかった。さらに，子どもたちの様子を見ていても，年長児ほど興味を示しているようには感じられなかった。

簡単にまとめておくとするならば，幼稚園教諭は栄養について詳しく知らなくても，子どもたちが食材について興味を持つことのできるような環境を作ろうと意識しているのに対し，小学校教諭はその意識がやや低いということである。小学校は時間の制約が厳しく，また，教諭はたくさんの仕事に追われており，自分の給食も素早く済ませ，給食時間に仕事をしている場合も多い。そのために，意識はしているが，給食時間において栄養指導をするというのはなかなか厳しいものがあるのかもしれない。

食育の時間を設けて，子どもたちに食について考える機会を与えることも非常に大切なことである。しかし，この時間を毎日設けることはできない。だからこそ，毎日必ずある給食の時間を最大限に活用して，食について考えることのできる環境を整えることが重要になってくるのである。給食時間は食について知るだけでなく，実際に食事をすることで，五感を通して体験的に学ぶことを可能にしてくれる。給食の時間は教諭自身も食事の場であるし，場合によっては様々な作業や仕事をすることのできる場でもある。そのことに追われてしまって，子どもたちにとっての学びの場を減らしてしまっているのではないだろうか。毎日の給食の時間で食を考えさせる機会を作ることは困難かもしれない。しかし，幼稚園教諭，小学校教諭ともに栄養指導発話を取り入れようという意識をもう少し高めていけば，今よりも給食時間が子どもたちにとって有意義な時間になるのではないかと考える。

繰り返すようだが，本研究では幼稚園教諭の方が小学校教諭よりも栄養指導発話の発話回数が多く，割合も高かった。小学校教諭はまずは幼稚園教諭の数値まで引き上げる必要がある。また，どちらの教諭にも言えることだが，子どもたちが食について興味を持つきっかけになる栄養指導発話を意識的

に取り入れていくようにしていかなければならない。

また，本研究は教諭の発話をデータ化し，分類して数値を出し，その数値から分析を行ったため，教諭がどこまで意識しているかなどは推測である。今後は，データ収集を行いながら，教諭に対する意識調査を実施し，その結果と比べることで，これからの給食時間の教諭の発話の在り方について考察することが課題である。

Ⅳ．むすびにかえて

本研究においては，幼稚園教諭と小学校教諭の給食時間における発話回数や発話内容，発話対象などの比較を行い，幼稚園教諭の方が小学校教諭に比べ，発話の総回数がやや多く，発話内容や発話対象の発話回数には幼稚園教諭と小学校教諭で数値や割合にわずかながら差があることがわかった。また，既存型の食育はほとんど行われていないことも判明した。

その原因のひとつに，時間に追われていることが挙げられるように推測できる。幼稚園においても，小学校においても，子どもたちにとって給食の時間が，五感を通して食について興味関心を持つことのできる有意義な時間となるには，時間的なゆとりとそれに伴う教諭の精神的なゆとりが必要である。さらに，教諭と子どもたちが一緒になって食育を進めていくためにも，もっとコミュニケーションを活性化していくことが必要である。たとえば，給食時間における私語厳禁は校内放送をしっかり聞くために，時間内に食べ終わるために，非常に理にかなった決まりである。だが，その決まりによって食育の指導が除外されているのではないかという反省もある。今後，給食時間における食育を充実させるためにも，給食時間における校内放送の有無や，決まりの在り方を再検討しなければならない。

また，幼小連携という観点からみると，幼稚園と小学校の差というものは，子どもたちに戸惑いを与えしまう。たとえば，幼稚園では子どもたちの様子に合わせて給食時間が臨機応変に決められる。しかし，小学校では，給食時間はしっかり決められており，その時間内に食べ終わらなければならない。この差が，子どもたちにとって大きな壁となってしまう。給食時間だけでなく，教諭の指導の仕方や決まりなども挙げられる。幼稚園と小学校の滑らかな接続を実現させるためにも，このような差をなるべく縮めていかなくてはならない。そのために，給食場面の幼小連携をすすめていく必要がある。まずは，幼稚園教諭と小学校教諭がお互いの指導の仕方や給食時間の子どもたちの様子についてお互いに認識しあうことが肝要である。その認識を深める資料のひとつとして，本研究の結果が参考になればと願いたい。

注

今村光章，2008,「給食時における幼稚園教諭の発話分析―幼児期における「既存型」の食育の枠組みの解明を目指して―」，岐阜大学教育学部研究報告：教育実践研究，第10巻，125-134頁。